

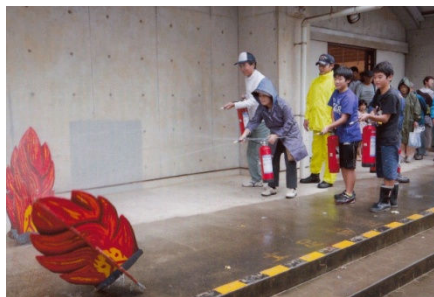
富岡地域づくり 協議会だより



第3号
平成27年10月8日
広 報 委 員 会

<http://www.town-tomioka.click/>

防災訓練について



8月29日(土)8時30分より富岡中学校にて、富岡地区防災訓練が開催されました。現地対策本部役員等を含め参加者420名程で、子どもから高齢者まで幅広い層の参加がみられました。

ただし、昨夜から降り続く雨のために受付からして体育館でのスタートになりました。防犯協会富岡支部の広報車による避難の呼びかけや、所沢市役所の防災行政無線での実施の連絡がなければ自主判断で参加をみあわせた方もあったのではと思われます。

この雨のために、タイムスケジュールの冒頭にあったテント設置が割愛され、これ以降も体育館が避難者の待機場所になりました。

外でやるはずの炊き出しも、体育館への通路で行われ、急遽の対応になりました。

初期消火訓練・煙体験訓練等外で実施できたものもあり、予定していた、ないしは、想定していた人数が体験できたものもありました。特に后者では体験した人から、「これが実際におきたらパニックになるかもしれない。」等の感想が聞かれました。

ポンプ車操法・防災用資機材取扱訓練は、諸事情に鑑み、実施が見送られました。

この後、体育館にて予定されていた負傷者応急手当訓練(心肺蘇生法、三角巾使用の止血法・骨折応急手当法等)及び避難所運営訓練はしっかりと時間をとって実施されました。「自分の命は自分で守る」「自分たちの地域は自分たちで守る」の心構えは確認できたし、実施できてよかったなと思います。

ところで、東日本大震災から4年が経過したということです。月日が経つのは早いものだと思います。当時、いわき市の中学校長であった古山隆一氏の緊迫感溢れる文章を目にしたのでここに紹介したいと思います



長くて早い一日の始まり・・・

2011年3月11日、折しも藤間中の卒業式。3年生担任と校長室にて卒業式に係る話をしていた午後2時46分、『ズシン』という音とともに始まった地震。立つことができないくらいの激しい揺れ、いつ止むとも分からない恐怖を初めて感じた地震・・・校舎、校庭、テニスコート等に地割れ、続いて津波警報発令、職員に体育館を避難所として開放する指示を出す。準備している間もなく、近くの特別養護老人ホームのバスが体育館に到着、それとともに次々に地域の住民や生徒たちが、体育館や校庭に集まり出す。職員に交通整理の指示。「いつもとちがう」。つびやきがもれる。校庭を埋め尽くした車。空が黒い。普段松林に隠れ見えない海が見えた。見えたと思ったら、次は真っ黒な海が迫ってきた・・・避難所運営とともに、子どもたちの安否の確認方法を考える。暗闇が迫り、あふれかえった避難者を収容するために校舎を開放。概算でも600人をこえる避難者の数。今後の不安がよぎるが進むしかない。地震が発生し、次の朝を迎えるまで、本来は不安で、長い時間・長い夜のはずが、一瞬のうちに流れていく・・・

この日から65日間、避難所運営、豊間中との共存、正常な教育活動をいかに子どもたちに提供するかの闘いが始まった・・・

【富岡地区敬老会の様子】 敬老会の様子を写真掲載しました。



<編集後記>

「炎天の似合うサルスベリの花が雨にぬれている。いつもの年なら名残の炎暑にあえぐ時なのに、ゆく夏の背中を見送るとまもなく秋の長雨である。・・・8月上旬は燃えるような日が続いた。夏の「炎帝」はそれで力を使い果たしたのか、関東あたりでは前略でいきなり秋になった印象だ。」8月29日（土）、防災訓練と同日の「天声人語」の一節です。降雨の中での防災訓練は、この十数年間で初めての経験であるといわれた方がありました。残暑の下で汗をかきながら、この防災訓練が行われるのが常で、この暑さが何とかならないかと思うことがしばしばだったので、確かなことかなと思います。

こうはいつでも、自然の災害は、時や場所や天候等を選んでくれる訳がなく、思いもよらない突然の襲来がほとんどで、予報すら及ばないことも多いのも事実です。それ故、雨天での訓練にもそれなりの意味や意義があるのかという思いも禁じ得ません。

ところで、あの東日本大震災から早いもので4年が経過しましたが、報道によると、未だに避難生活を余儀なくされ、生まれ故郷ないしは本来の生活の場に戻れない人が多くいるとのこと。一日も早い復旧を念じつつ、我々も被害に遭わないように日々の心構えや防災のための準備等の対応が大事であることを実感しました。